

所謂「謙讓語の丁寧語化」について

——「尊者定位重視」の敬語から「自己定位重視」の敬語へ——

森 山 由 紀 子

キーワード…謙讓語 丁寧語 敬語史 マラスル 文法化

はじめに

日本語における敬語法の通時的展開のトピックの一つとして、中世期を端緒とする、所謂「謙讓語^①の丁寧語化」という現象が指摘されている。これは、中古的敬語法においては、所謂「行為の受け手」という、素材を待遇するために用いられていた表現が、近代敬語の発達の中で、聞き手めあてに用いられるようになっていく現象であり、現代日本語における敬語法の基盤を明確にする上でも重要であるばかりでなく、ある語彙が、通時的な流れの中で、新たな文法的意味を獲得していく過程のサン

ブルとしても、さまざまな興味深い問題を内包している。

従来の研究において、この現象は、金田弘（一九八一）が、中世を通じて使われた「申す」「いたす」「つかまつる」などの用法についてみると、上位者を客体とする動作、ないしは上位者への敬従関係を前提とする下位者の動作を表す敬語から、話し手が聞き手に対する敬意を示す敬語へ移行する傾向が見られ、ここに謙讓語漸減、衰退のきざしをうかがうことができる。（傍線筆者）

と、述べているのに代表されるように、①「対者敬語の発達」と、それと表裏の関係にある②「謙讓語の衰退」を示すものとして理解されてきた面がある。

しかし、第一に「対者敬語の発達」といった説明は、単に現象を把握したものに過ぎず、さらにもう一步踏み込んで、なぜどのようなメカニズムで、こういった現象が生じたかを考える必要があると言える。そして、そういった変化のメカニズムを、各用法における人間関係の認識の在り方という観点から整理していけば、「謙讓語の丁寧語化」が、そのままに「謙讓語の衰退」に結びつくわけではなく、その背後に、「尊者定位重視の敬語から自己定位重視の敬語へ」⁽²⁾という、大きな流れが作用していると考えられるのである。

一、謙讓語が「丁寧語化」するまでの諸段階の整理

そもそも、素材敬語である謙讓語と、対者敬語である丁寧語とは、話し手による人間関係の認識の在り方という観点から、どのような違いがあるのだろうか。「謙讓語」と言われるものであっても、用法上の制限に注目して、その表現を用いる場合の認識の在り方を考えれば、現代語と、古典語とはいくつかの違いがある。また、「謙讓語の丁寧語化」と言われる場合の「丁寧語」とは、広い意味での対者敬語をさして用いられてい

るが、現代の対者敬語は、その用法上、「丁寧語」と「丁寧語」という二種類に分類される。従って、どちらのタイプの対者敬語への移行なのか、ということを明らかにする上でも、やはり「対者敬語」の認識の在り方を整理する必要がある。そして、そういった認識の在り方を考えることから、それぞれの敬語法相互の関係も明らかになっていくものと考えられる。

第一に、平安時代の文獻に見出される「謙讓語」は、
(1) (帝が) 一の宮を見たとてまつらせたまふにも…

(源氏物語・桐壺)

といった例から、

A 「尊者 (この場合は一の宮) に関わる行為である」という認識を表現する

ものと考えられる。つまり、この段階においては、①「行為の主体は必ずしも『下位者』である必要はなく (用例1の場合は帝)」、また、②「聞き手が誰であるか」ということは一切関与しない。

しかし、現代の敬語表現には、これにそのまま該当する形式は存在しない。というのは、現代日本語において「謙讓語」と呼ばれる形式は、すでに指摘されているように、

(2) 課長が社長にお会いされた。

のように、「行為の主体（この場合は「課長」）が「尊者（この場合は社長）」よりも下位である場合に限られ、行為の受け手である課長に敬意を払うとしても、

(3) *社長が課長にお会いされた。

のように、用いられないからである。つまり、前出のAの段階の謙讓語から、

B「尊者に関わる下位者の行為である」という認識を表現する

という段階への移行が、いずれかの時点で生じ、これが、概ね現代の謙讓語につながるものであると⁽⁵⁾考えられる。

他方、現代語における「対者敬語」には、大きく二つのタイプがあることが既に指摘されている。一つは、宮地裕（一九六五）において「丁寧語」と分類された、

(4) 私が、この仕事を致しました。

(5) 私は、これから面白い物に参ります。

といった類のものである。これは、①「聞き手を敬意の対象とする」と同時に、

(6) *先生が、この仕事を致しました。（致されました。）

所謂「謙讓語の丁寧語化」について

(7) *先生は、面白い物に参りました。（参られました。）

とは言えないことからわかるように、②「行為の主体を話し手に対して下位に位置づける」という性質を持つ。このことは、行為の主体が人物である場合には、たとえそれが目上の人物でなく同等の人物であったとしても、自分の側に属する人物でなければ、話し手が勝手に下位に位置づけることはできないので、

(8) *Aさんが、この仕事を致しました。（致されました。）

(9) *Aさんは、面白い物に参りました。（参られました。）

「Aさん」が、聞き手に対して、特に話し手側の人物にあたらない場合。すなわち「Aが」と言うことのできない場合。）

のように、やはり不適切な表現となることから裏づけられる。これは、対者敬語でありながらも、やはり、素材の上下関係によって運用が決定される⁽⁶⁾ということであり、この点において、「丁寧語」と区別される。

そして、その「丁寧語」とは、

(10) 鳥は空を飛びます。

(11) 先生がいっぱしゃいます。

(12) 鳥は生き物です。

所謂「謙讓語の丁寧語化」について

六六

(13) 先生は滋賀県のご出身です。

のように、①「聞き手を敬意の対象とする」だけでなく、②「主語の属性等に関わりない」、③「文体的な表現である」という特質を持ち、後者の二点において「丁寧語」と区別される。

このように「対者敬語」が二種に分けられるのに対応させようとするならば、所謂「謙讓語の丁寧語化」も、二つに分けなければならぬ。すなわち、

(イ) 行為の主体が話し手(側)である場合に限られ、行為の主体を下げるという意味を保存したまま、対者への敬意を表現する場合(謙讓語の丁寧語化)と、

(ロ) 認識の内容に関わりなく、あらゆる内容の表現に文体的に用いることによって対者への敬意を表現するようになる場合(謙讓語の丁寧語化)という、二つのタイプが論理的に想定される。

そして、それぞれの表現を支えている認識の在り方という観点から見れば、(イ)「謙讓語の丁寧語化」のほうは、

C「聞き手に対して下位者である話し手(側)の行為であ

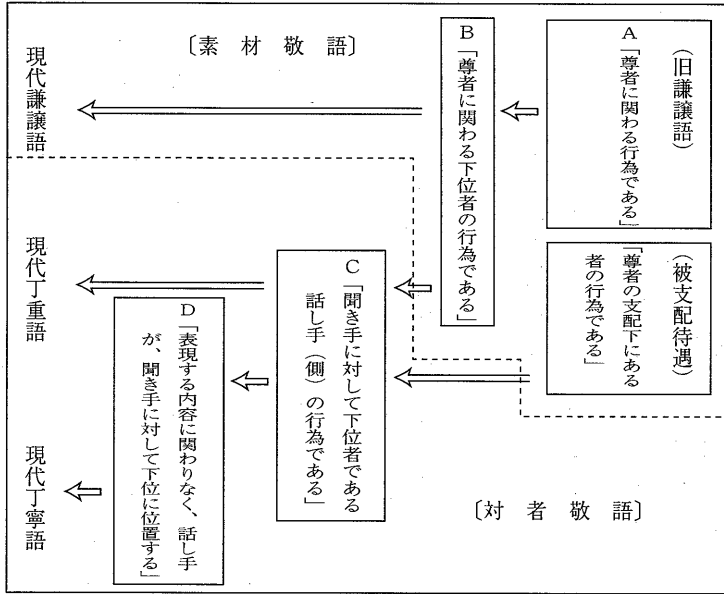
る」

という認識への移行であり、(ロ)「謙讓語の丁寧語化」のほうは、

D「表現する内容には一切関わりなく、話し手が、聞き手に対して下位に位置する」
という認識への移行であると言える。

なお、「謙讓語の丁寧語化」について考えるとき、「被支配待遇」「かしこまりの語法」と呼ばれる「侍り」「候ふ」「仕る」といった語彙も密接に関係している。「侍り」「仕る」なども、「侍られる人」「仕られる人」を上位待遇する表現として用いられている限りにおいては、「尊者の支配下にある者の行為(存在)である」ことを表現しているわけで、これはあくまでも素材敬語であると言える。ただし、これらの語は、尊者を行為の目的格にとらず、「尊者のもとに存在する」といった、「被支配」を表しているという点で、「謙讓語」とは異なることが指摘されている。しかし、「侍り」や「候ふ」に代表されるように、これら「被支配待遇」を表す語彙も、「謙讓語」と同様、対者に対する敬意を表すようになっていく。つまり、対者敬語には、「謙讓語」出自のものと、「被支配待遇」出自のものとの、

図1



所謂「謙譲語の丁寧語化」について

二つの系列があるということである。

以上述べてきた、素材敬語であるA「旧謙譲語」・B「新謙譲語」、「被支配待遇」、及び、対者敬語であるC「丁寧語」・D「丁寧語」における、それぞれの認識の在り方を整理すると、図1のような流れの模式図が想定される。(◇は、質的な変化が起こったことを示す。)

上図において◇で示した、変化の時期は、それぞれの語によって異なってくるが、中でも「申す」の場合は、

(14) (隨身→源氏)「かの白く咲けるをなん夕顔と申し侍る」

(源氏物語・夕顔)

のように、対者めあてに用いられた例が、すでに中古の文献の特に会話文において用いられていることが杉崎一雄(一九七八)等によって指摘されている。この、「申す」については、(14)の例のように、目的格を明示しないでも用いられる性質の語彙であることから、「謙譲語の丁寧語化」としての現象ではなく、「侍り」などと同類の「被支配待遇」としての用法から、Cの用法へと移行したものであったために、Cの用法が早く現れたのではないかと考えている。本稿では詳しく触れ得ないが、「侍り」にしても「候ふ」にしても、「被支配待遇の丁寧

語化」は、「謙讓語の丁寧語化」にさががけて生じている。これらの語は、「謙讓語」と異なり、素材敬語である「被支配待遇」であつた段階において、すでに、「行為者の下位定位」という表現価値を担つていたわけであるから、AからBに移行する必要がないぶんだけ早くCに移行することができたということが考えられる。そして、その出自はともかく、Cの用法の出現が早ければ、Dの用法の出現も早く、大塚（一九六六）が指摘するように、

（15）元正云「またくあやまたざる事なり。申さるゝが如く

…」

（古今著聞集・六—二三）

と、すでに鎌倉時代前期に、明らかにDの用法で用いられた例が見出される。

二、話し手の下位定位を経て対者敬語へ

— B段階からC・D段階への移行 —

さて、本稿において考察しようとするのは、「謙讓語」から対者敬語へと移行していく過程、すなわち、A・BからC・Dへの移行である。中古において「謙讓語」として活発に用いられていたものが、中世を経て、後に「丁寧語」として用いられ

るようになっていくという、まさに「謙讓語の丁寧語化」の代表例となる形式が、「マキル→マキラスル→マラスル」である。この移行は、どのようなメカニズムで生じたのであろうか。

まず、B「尊者に関わる下位者の行為」という時の「下位者」には、当然、話し手以外の人物が該当する場合（B1）と、話し手本人が該当する場合（B2）とが想定される。そして、さらに、話し手を主語とするB2のタイプに属するものの中には、①被行為者（尊者）が三人称である場合と、②被行為者（尊者）が聞き手と一致する場合とが想定される。

従つて、このB2②の場合の「敬意の対象」は、被行為者であり、また、聞き手でもあるということになる。しかし、こういった状況は、謙讓語においてもしばしば見られる状況であり、これだけでは、《謙讓語》が、対者敬語になったということはできない。

《謙讓語》が、はじめて「対者敬語」としての性格を帯びてくるのは、「行為の内容が、尊者（≡聞き手）に関わるかどうか」を問わず、「尊者である聞き手の前で、自分の行為に言及する」場合に「マラスル」という形式が用いられるようになる、Cの段階からである。従つて、『閑吟集』（一五一八年）の、

7

『安小歌集』にある、

は何としまらせう

という例は、確実にCの段階であると言える。

いるという、Aの用法の「マキラスル」が、

ニマウケマイラセラレタソ

定—ヲハ本太子ヨリモイトウシカリマラセラル、ソ

(清原宣賢・一五三四年『蒙求抄』四一一才)

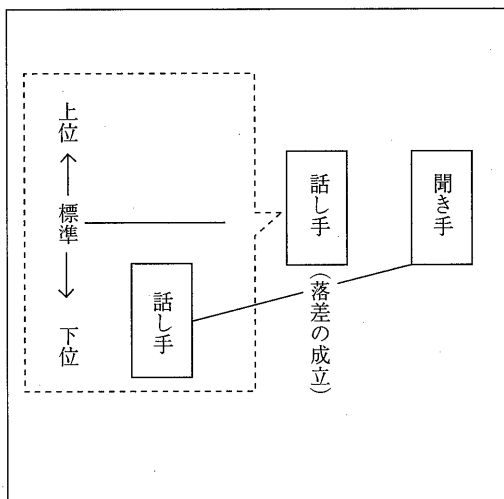
所謂「謙讓語の丁寧語化」について

を描いたものである。

えられる。そして、先に挙げた抄物資料の持つ、文章語的性格

所謂「謙讓語の丁寧語化」について

図Ⅱ



を考えると、文献上の重複は、この判断を覆すものではないと言えよう。

そして、こういったBからCへの変化は、話し手が、話題の中の登場人物を位置づけていた段階から、「話し手」としての自己の位置づけを行うようになる変化であると解釈することが

できる。と、するならば、この変化は、「この人物は尊者である」と定位することを目的とする「尊者定位重視の敬語」から、「話し手が、自分の立場を定位する」ことを目的とする「自己定位重視の敬語」へ方向へと、一段階進行したものであると位置付けることができる。

次に、「話し手を低く定位する（下位者の発話であることを表す）」ことによつて、聞き手に対する敬意を表現するようになった「マラスル」が、D「丁寧語」の段階、すなわち「表現する内容には一切関わりなく、話し手が聞き手に対して下位に位置する」という認識を表現することができるようになるには、どういった過程が想定できるであろうか。

この、D「丁寧語化」の段階というのは、「行為の主体が何であるかに関わりなく」対者に向けての敬意を表現することができるという点で、Cの段階と区別されるものであった。つまり、Cの段階では、行為の主体が話し手に限られるのに対して、丁寧語というのは、先に述べた通り、

(20) 先生が部屋にいらっしゃいます。

(21) 鳥は空を飛びます。

(22) ここは、よく事故が起こります。

のように、行為の主体が目上の人物であろうと、動物、事物であろうと、そういったことに一切関わりなく運用されなければならない。

そこで、そういう目で見るとすれば、

(23) さあらば、また某にこの讒言を申し掛けた人々にも私がごとくに仕れと仰せ付けられいかし。しからば食した人(小姓たち)は必ず現はれませうずる」と申せば……
(天草本エソポ物語・四二二頁)

(24) 件の両人が悉く存じ尽くいたによつて、私が存ずる爲に何も残りませぬ。
(同・四一四頁)

(25) エソポこれを見て、たち帰って、「風呂にはただ一人居まらする」と(シャントに)言うたれば、すなはちシャント喜うで風呂に入らうと赴かるに……
(同・四一七頁)

(26) 下人共皆集まりまらした。

(ロドリゲス日本大文典・邦訳五八五頁)
(27) 百姓共当年の御年貢を量りまらした。
(同右)

といった例は、確かに、話し手が行為の主体となっていないという点で、Cの段階を脱したものである。しかし、この(26)

所謂「謙譲語の丁寧語化」について

(27) の例文が挙げられている箇所が付されたロドリゲスの説明には、次のように記されている。

(28) ○身分の低い者が、目上の人と話したり貴い方の前で話したりする場合に、この助辞に先行する動詞が身分の低い者か特別に敬意を払ふ必要のない者かの動作を示す時には、この助辞を使はねばならない。……
(同右)

つまり、行為の主体が話し手に限られるといった制限がないこと、また、「対者」めあての敬意であることについては、問題ないのであるが、傍線をほどこした部分にあるように、行為の主体が、目上の人物であつてはならないという制限は、依然として指摘されているのである。確かに、(23) から(27) の用例を見ると、事柄を主語としている(24) の例を除き、人物を主語とする四例において、「マラスル」が付されている動詞はすべて、対者に比して明らかに下位者を行為の主体としている。ということとは、右の五例は、確かにCの段階にはないけれども、やはりなお、行為の主体が上位者であつてはならないという制限のもとに用いられているわけであつて、完全なDの段階にも至っていないことになる。

さらに、『天草本エソボ物語』に見える「マラスル」のうち、Cの段階をはずれるものは右にあげた(23)―(25)の三例のみであつて、他は、たとえ対者めあてに用いられたものであつても、自分を主語にしたCの段階のものばかりであることから、この三例は、Cの段階を逸脱した、ごく初期の用例であることが言えるであろう。また、安田章(一九七三)は、一五九二年から一六〇二年に日本に滞在していた康遇聖が最初に著した『原刊本捷解新語』には、尊敬の動詞・助動詞などに重ねて付される「マルスル」(即ち「ラレマルスル」など)が、わずかに五例しかないのに対して、一七六五―一七七〇年に刊行された『改修本捷解新語』には、一八〇例も見られるということに、「話し手にウェイトを置く」第二次敬語法の展開を認めねばならない」と述べているが、Cの段階をはずれる用法が出現してから、こういった、本来の意味でのD「丁寧語」が定着するまでには、上位の者を主語とするよりは、下位の者を主語としたほうが、「マラスル」が用いられやすいという、過渡期とも言えるワンクッションが存在し、次章に述べるように、それが、短からぬある一定の期間存在した事実を、見過ごしてはならない。

実際、この過渡期にあたる、江戸時代前期の「マラスル」「マス」について見てみると、

(29) たのふだ人申されま^すは、…と申されま^すする。

(一六四二年『虎明本狂言集・松やに』)

(30) ア、ようお出でなされま^すした。大坂のお衆でござりま^すか。

(一七〇六年『ひぢりめん卯月の紅葉』)

のように、尊者を主語とする動詞に付されて完全な「丁寧語」とみなされる用法で用いられている一方で、その同じ形式が、同じ文献において、

(31) (大名↓太郎冠者) 汝は各のかたへゆき、…ござつて

くだされひといふて、よびま^らしてこひ

(『虎明本狂言集・松やに』)

(32) (滋野井↓お仲居若衆) 「それは聞き及うだ、道中の絵

を見せま^し…」

(一七〇八年『丹波与作待夜待夜の小屋節』)

(33) (親↓娘) これおむめ、久米様二階へ連れま^して、新

しう出来た寝道具を見せま^しや。

(一七〇八年『心中万年草』)

と、B「謙讓語」としかとれない用法で用いられているとい

ことが、しばしばある。

このような現象は、確かに一面から見れば、本来「謙譲語」としての機能を有していた「マラスル」「マス」が、一方で新しく「丁寧語」としての機能でも用いられるようになっていたということを示すものであり、従来から、まさにこの点をもって「謙譲語の丁寧語化」ということが言われてきたのであった。しかし考えてみれば、この現象がもしも本当に、謙譲語の「丁寧語化した」結果であるならば、謙譲語本来の機能になう語が足りなくなると考えられる例が出てきてしまう。たとえば、

(34) いや、身共らも久しう見廻まらせぬ程に、定てうらみられまらせう (虎明本狂言集・さいほう)

(35) (三吉↓当番) これ旦那様、盗んだ銀は返しますと

(丹波与作…)

のような文脈において、現代語ならば(30)「お見舞いしていませんで」(31)「お返しします」のように、謙譲語と丁寧語とを重ねて用いることが必要とされるはずであるところが、「マラスル」或いは「マス」という、一つの形式だけで済まされていくことになる。従って、これらの「マラスル」

所謂「謙譲語の丁寧語化」について

「マス」が、もしも丁寧の意味だけになっていったとするならば、謙譲の意味を表す語が足りないということになるわけである。つまり、この当時の「マラスル」「マス」は、その本来の意義において現代の「丁寧語」とは異なり、丁寧語としての敬意を表すと同時に、「謙譲語」としての意味をもになっていたということが考えられる。

冒頭に挙げた金田弘の記述に代表されるように、所謂「謙譲語の丁寧語化」は、しばしば「謙譲語の衰退」と結び付けられることが多い。しかし、たとえ従来謙譲語として用いられていた語集が対者敬語としての機能を持ちはじめたとしても、現代においてもなお、「謙譲語」という敬語のカテゴリーは必要とされている以上、「謙譲語」というカテゴリーが「丁寧語」に変化していったわけではない。にもかかわらず、「マラスル」「マス」に代わる新しい謙譲語の形式が、わずかに活動をはじめていた「申す」を除いて、いまだ確立していなかった、この過渡期において、「マラスル」「マス」が、「謙譲語」としての働きと「丁寧語」としての働きを同時にになっていたということとは、きわめて理にかなったことであると言えるのである。

三、「自己」定位重視の敬語」への傾斜と

「現代丁寧語の分出」の過程

では、前章で述べたような、「謙讓」と「丁寧」を同時にになう敬語とは、どのようなものであったと説明できるだろうか。

現代語における「丁寧語（聞き手尊敬）」について、例えば渡辺実（一九七二）は、

「話し手が話の場面の聞き手に対して抱く敬意を最も直接的に表す敬語」

としながらも、特に「です」「ます」については、

「話し手が自分の言葉の嗜みとして他人への敬意とは無関係に用いる敬語」

として用いられる場合もあると説明している。これは、買い物場面など、必ずしも、話し手が聞き手に対して「敬意」を抱いていない場合を考慮した記述であり、「文体」としての丁寧語の存在を指摘したものであり、特定の人物に対する敬意とは無関係に丁寧語が発動される場合が存在する⁽⁹⁾ということを示している。そして、「敬意を表現するために発動される敬語」が、

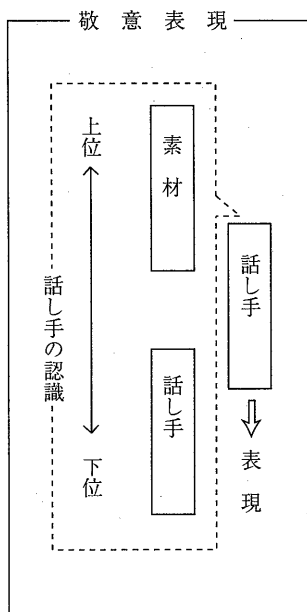
「話し手が、年齢や、地位、立場など、何らかの基準によって、

その人物を自分より上位と認める意識」であるのに対して、「敬意とは無関係に発動される敬意」とは、「その場において、話し手が、敬語的文体を用いるべきであると判断する意識」である。そして、その判断は、聞き手との間の上下関係のみならず、ウチ／ソトの別や、親疎関係、恩恵関係、発話の環境、話し手の自己認識⁽¹⁰⁾といった、さまざまな要因に基づいて行われる。これが、すなわち、「文体」の選択である。

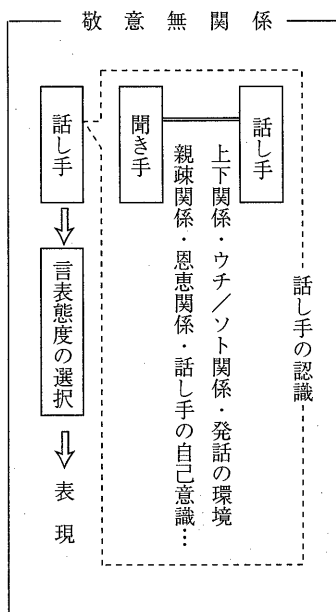
つまり、「敬意を表現するために発動される敬語」（図Ⅲ）とは、話し手による、素材と自分との間の上下関係の認識の在り方を示すものであり、「敬意とは無関係に発動される敬語」（図Ⅳ）とは、話し手の、その場における聞き手との関係や、その他の、さまざまな要因の認識に基づいた、話し手自身の（言表）態度の在り方の判断を示すものであると言えるのである。

このように考えると、室町末期から江戸中期にかけての「マラスル」「マス」は、「対者敬語」として用いられてはいても、「話し手が、聞き手に対して、話し手である自分を低く定位する」ことによって、話し手が、聞き手を上位に認識しているということを、積極的に表現しているという意味で、現代語における「敬意を表現するために発動する敬語」（図Ⅲ）に相当す

図Ⅲ



図Ⅳ



内に対しては素材敬語を用いないという、現代敬語のルールも、「ソトの人に対する時」に運用されるものであり、言表態度の判断を経て選択された一つのスタイルであると考えられる。

所謂「謙讓語の丁寧語化」について

る性格を有していたと言える。

そして、当時の「謙讓語」は、「話し手が、素材に対して行為者を下位に定位する」ことによって、被行為者を上位に待遇するものであった。従って、「素材⇨聞き手・行為者⇨話し手」となった場合には、「謙讓語」と、「丁寧語」は、全く同じ構造を持つことができたのである。だからこそ、(34) (35) のように、「謙讓語」を用いるべき意味と、「丁寧語」を用いるべき意味とを、「マラスル」一語で表現してしまうということが可能であったと考えられる。

このように、当時の「マラスル」「マス」が、自己の下位定位という意味あいを強く残していたことは、前章に述べたように、「マラスル」の丁寧語化が、「自己の下位定位」という、Cの段階からはじまったと考えられることや、この過渡期においてもなお、

(36) 某はいそぎまらする、ごめんなれ。

〔虎明本狂言集・こぶうり〕

(37) いや、縛らるる咎は持ちませぬ。

〔薩摩歌〕

(38) 錠を下して動かせず、蚊に食はれてゐましたが：

〔同右〕

所謂「謙讓語の丁寧語化」について

のように、自己の動作に付されたC段階的なものが多数を占めることから、十分納得し得ることである。

そして、「丁寧語」が、次第に現代のような文体的な性質を獲得していくに従い、当然、「謙讓語」と「丁寧語」とが、同じ形式を持つことはできなくなる。そこにおいて、「マス」は、丁寧語専用の形として卓立し、「謙讓語」は、新たに「おし申す」「おしする」という形をとって、「マス」から分離していったものと思われる。これは「丁寧語の、謙讓語からの分出」でも言うべきものである。

もっとも、現代語においてもなお、「行為者の下位定位」という意義をもつ「丁寧語」が用いられているけれども、それは必ず「丁寧語」とともに用いられ、しかも、多くの場合、公の場でのスピーチや、接客用語など、特に聞き手が限定されない場合に用いられる。このことは、現代における「丁寧語」もまた、「丁寧語」と同様、話し手自身の言表態度の在り方を示すために選択される一つのスタイルであって、同じように、「話し手」が自己を下位に定位する表現を手段としながらも、江戸時代の「マラスル」や「マス」のように、「聞き手」を上位に認識することを目的としたものではなく、あくまでも、そう

いったスタイルを選択することを通して、自己の言表態度をへり下らせることを目的としたものであることを示している。⁽¹²⁾

そして、このような対者敬語の在り方の違いも、本来の意味で、対者を尊者として待遇するという、「尊者定位重視の敬語」から、自己の言表態度の表明という「自己定位重視の敬語へ」という方向へと、敬語を要請する原理が変化しつつある結果であると解釈される。すなわち、「現代丁寧語」の成立は、先代の敬語表現における、「言表内容内部での自己定位」に加えて、新たに、「自己の言表態度全体の定位」という操作を行うことによって、人間関係の把握の仕方を表現する方法を獲得した結果であると考えられるのである。

〔注〕

(一) ここで言う「謙讓語」とは、行為の目的格にあたる人物を上位待遇する表現を意味しており、具体的には現代語における「おしする」「おし申し上げる」「伺う」「差し上げる」等のグループに該当する。一方、「行為の主体がへりくだる」という面を重視した広義の「謙讓語」としては、先に述べたものとは異なり、素材の表現でありながらも対者への敬意を表すために用いられる、「致

す」「存ずる」「参る」「イタス」等のグループが含まれる場合もある。本稿では、これら、対者めあての敬意表現として用いられるものについては、宮地裕（一九六五）の命名に従い、「丁重語」と称し、「謙讓語」とは区別することとする。

(2) 筆者が、敬語表現の通時的な流れを説明する原理として考察中の仮説である。

(3) 「尊者を受け手とする」とせず、あえて「尊者に関わる」とする理由の概略については、森山由紀子（一九八九）（一九九〇）等で述べた。

(4) *印は、その文における当該の敬語表現が不適切であることを表す。以下同じ。

(5) 森山由紀子（一九九〇）等で述べた通り、中古謙讓語に対して、現代謙讓語においては「尊者に関わる」という部分の関わり方に大きな限定が生じていると考えられるが、本稿においては、その点には触れないこととする。

(6) ただし、現代語においては、行為者が人物でない場合でも、

- ・なにぶん野良猫が致したことです、あきらめるほかございません。

- ・風が吹いて参りました。

という表現が可能であることから、素材の表現を離れて、文体的な性質を多分に帯びつつあると言える。なお、菊

所謂「謙讓語の丁寧語化」について

地康人（一九九四他）では、一人称を主語として、主語を低める働きを持つ場合（例5・6の類）を「謙讓語B」と称し「高める必要のない三人称」を主語として、単に聞き手に対する丁重さを表す場合だけに使われる場合（「猫が…」風が…」の例の類）を「丁重語」と称して、両者を明確に区別している。さまざまな面で有効な分類であると思われるが、ただし、現在のところ、「謙讓語B」と、「菊地」丁重語」とは、形式の面で全く重なっている、本稿においては、形式に重点を置いた分類を優先し、「謙讓語B」と「菊地」丁重語」の違いは、未だ「用法の拡張」の段階にあると位置づけたい。

(7) 次の例とともに、大塚光信氏のご指示による。

(8) 石田春昭（一九三七）が特に、近松門左衛門の作品について詳しく指摘している。

(9) このことは、何も、「です」「ます」といった丁寧語に限られたことではない。

- ・(店員に)「さっき、ここにいらっしゃった店員さんに、もう一度お聞きしたいんですけど。」

- ・(初対面の人に)「〇〇銀行をご存じないですか。」

のように、対者敬語を用いる文体の中では、素材敬語の敬意の対象も、必ずしも、「話し手が『敬意』を抱いている人物」であるとは限らない。それに対して、同じ立場の人物を、純粹に素材として待遇する場合には、

所謂「謙讓語の丁寧語化」について

七八

・? 「さっき、ここにおられた店員さんにもう一回聞いてみよう。」

・? 「ここを通られた方に伺ってみたけど、わからないっておっしゃってたよ。」

のように、「尊敬語」や「謙讓語」が、「話し手が敬意を抱いていない人物」に用いられることは、普通ない(ただし、関西方言における「ハル」を用いれば、「さっき、ここにいはった店員さんにもう一回聞いてみよう。」「ここを通らはった人に聞いてみたけど、わからへんて言うたはったわ。」のように、言うことができる。)

(10) 例えば、自分は上品な人間であるという意識など。

(11) なお、現代丁寧語の起源としては、ここで述べたもののほかに、「尊敬語」出自の「御座ある・おちやる」の類があるが、この、一見反対に見える形式の丁寧語化の現象も、やはり、自己の言表態度の定位という観点から説明できそうである。

(12) 注6で述べたように、最近は文体表現としての性質がさらに強まりつつある。

【文献】

石田春昭(一九三七)「近松に於ける「マス」の古格」

(『國語國文六—二二』)

大塚光信(一九六六)「中世敬語の特質」(『國文学』臨時増刊号二—一八)

金田 弘(一九八二)「中世敬語と現代敬語」(講座日本語学9敬語史『明治書院』)

菊地康人(一九九四)『敬語』(角川書店)

杉崎一雄(一九八八)「平安時代敬語法の研究——「かしこまりの語法」とその周辺」(有精堂)

宮地 裕(一九六五)「敬語の解釈」(『国研論集』ことばの研究2『秀英出版』)

森山由紀子(一九八九)「謙讓語の成立条件——『謙讓』の意味を探索の試みとして——」(『奈良女子大学文学部研究年報31』)

(一九九〇)「落窪物語の謙讓表現と現代語の謙讓表現——『謙讓』をめぐる史的考察の端緒として——」(『叙説17』)

安田 章(一九七三)「改修捷解新語解題」(『三本対照捷解新語』京都大学國文学會)

渡辺 実(一九七一)「敬語体系」(『国語構文論』附説・塙書房)